びわこの考湖学

—第2部—

28

貴族たちのタイムカプセル「経塚」

救いの望み 後世に託して

「タイムカプセル」を埋めたことはありますか？ 昔の人々も、自分の「想い」を入れ物に詰めて地面に埋めました。けれどそれは、仏教思想に基づいた、とても切実で真剣な願いを込めたものでした。このタイムカプセルを、「経塚」と呼びます。

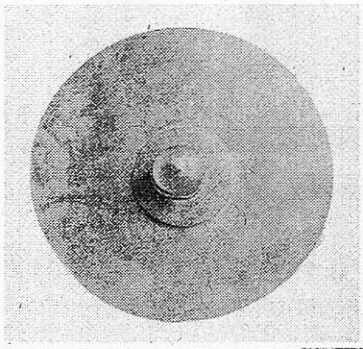
経塚とは、お経を土に埋めた施設です。お経を埋める行為を「埋経」、お経を納めた入れ物を「経筒」といいます。経塚には、土を掘っただけのものや盛り土をしたもの、板状の石や瓦で小さな部屋を作っているものなどがあります。経筒は、青銅製や陶器製、磁器製、石製などがあり、円筒形や宝塔形などがありますが、ほとんどが経筒専用として作られていて、材質ごとにある程度決まった形をしています。

現在わかっている最古の経塚は、藤原道長が寛弘4年（1007）に和歌山県金峯山に造営したものです。平安時代には、北部九州の貴族に大流行します。鎌倉時代～室町時代には埋経のやり方が定型化して全国に広がり、江戸時代には石に一文字書くだけ、という簡単な形になって庶民にまで行われるようになりました。

初期の経塚に込められた願いは、永承7年（1052）に始まるとされる末法の世が近づくのに対し、「今は世の中が荒れているけれど、死後の私の魂を56億7千万年後に現れる弥勒菩薩に救ってもらいたい」というものでした。そのためにお経を書き写す「写経」という功徳を積み、それをタイムカプセルに入れて未来へ伝えようとしたのです。

このように切実なタイムカプセルなので、埋める場所も慎重に選ばれました。全国的にも、「霊山」とされる場所には経塚が多く造営されています。

もちろん滋賀県にも経塚造営のブームは到来しました。



浮御堂近くの琵琶湖底から見つかった経筒㊤とその蓋㊧
（滋賀県教育委員会提供）

滋賀県の霊山といえば、比良山、伊吹山、三上山などですが、経塚造営が仏教思想をベースにした行為である以上、最も適した場所は、やはり延暦寺のある比叡山でした。

大正12年（1923）、比叡山の横川で如法塔再建工事を行った際、青銅で作られた塔が出土しました。中にはお経を納めた大変優美な青銅製の箱があり、他にも多くの遺物が出土したそうですが、落雷によってほとんどが焼失してしまいました。その後さらに大正13年（1924）、昭和40年（1965）にも、周辺から経筒をはじめ多くの遺物が出土しており、現在では「横川経塚群」として認識されています。これらは、第22回にご紹介しました円仁が書写したものを、円仁と同じ天台僧の覚超が埋納したものと考えられています。

円仁は、唐で仏教弾圧を目撃して、経典の保存の必要性を痛感し、写経を行いました。それは、自分だけでなく、多くの仏教徒を救おうとする行為でした。

また、平安時代中期の天台僧、源信によって創建されたと伝えられる浮御堂（満月寺）そばの湖底からも経筒が発見されています。残念ながら現在は、経筒の蓋のみが残されていますが、「自由都市」と称される堅田においても経塚造営が行われていたということが、当時の人々にとっての信仰の重さを示しているようにも思えます。

（財団法人滋賀県文化財保護協会　阿刀弘史）